

1◆タイトル:

あなたの“卒論”、何だった？

2◆サブタイトル:

ゴールデン街 100 人の卒論名鑑

3◆キャッチコピー:

“卒論”には、青春の日々が詰まっている！

4◆企画概要:

「突然ですが、“卒論”、何を書きましたか——」

新宿ゴールデン街にやってきた老若男女さまざまな人々に、“卒論”について聞いて回ります。ほろ酔い気分で語り出す、学生時代に夢中になった学問、心血を注いだテーマ、青春の日々の思い出話に、笑えて泣けるエピソード……。

多様な学問の最高機関である大学。そこで学んだことの集大成が現れる“卒論”にこそ、その人だけの**価値観**が表れているはずです。中でも、卒論のテーマと人生が深く結びついている人、現在の生き方と卒論のテーマとで大きなギャップがある人など、特徴的なエピソードを中心に掲載していきます。そこから得られる「生きる上での教訓」も紹介する予定です。

人それぞれのライフストーリーを楽しむもよし、学生時代を思い出す手がかりにするもよし、トンデモ研究にびっくりするもよし。卒論のテーマに悩む学生さんの参考にも！新宿ゴールデン街を主軸に据えつつ、銀座や秋葉原、神保町など、特徴的な街に集う人々にインタビューした特別編も収録。十人十色の青春と熱意が詰め込まれた、色とりどりの“卒業論文”に迫るごった煮本です。

5◆企画者名:

三七十

6◆企画者プロフィール:

早稲田大学文学部 4 年。現代日本文学を専攻しています。大好きな女性アイドルの考察を中心に、「都市における『少女』消費の変容」をテーマとして卒論を執筆しながら、周りの友人たちの様々な卒論テーマ（「谷崎潤一郎」から「プリキュア」まで！）に驚かされています。「現役学生」「卒論執筆中」という立場を利用すれば、周囲の友人や教授たちから卒論について聞き込むことができます。サークルは文学サークル・イベント企画サークルなど、3つのインカレサークルに所属しており、早稲田大学以外にも、全国の様々な

大学に幅広いツテがあります。

また、新宿ゴールデン街のプチ文壇バー「月に吠える」にてインターンライターをしています。ゴールデン街に出入りしていると、本当に老若男女様々な人が訪れていることに驚きます。この立場を利用し、ゴールデン街にやって来た様々なお客様や、名物ママさん・お店番の方たちにインタビューを行うことができます。加えて、「月に吠える」は文学好きや出版関係のお仕事をしている方がたくさん集まるバーのため、現役ジャーナリストであるマスターをはじめ、出版関係のプロの方々から取材執筆に関するアドバイスをいただくこともできます。

私は「人間一人一人がもつライフストーリー」に非常に興味があり、これまで、ウェブメディアやフリーペーパーの編集・ライターとして、20回近くのインタビュー・記事執筆をしてきました。指名をいただいて執筆したこともあり、アイドルや写真家・漫画家など、特殊な職業についている方々にもツテがあります。

7◆読者ターゲット

●メインターゲット：

・社会人、主婦

一見“ふつう”の人々が秘めている個性的なライフストーリーを楽しんでもらい、様々な生き方があることを知ってもらいます。自分と似た状況にいる人や自分とは異なる生き方をしている人の話を読むことで、共感したり、生き方の参考にしたり、全く知らない世界を覗き見て楽しむことができます。また、実際に「卒論」を書いたことがある人なら、自分や友人の書いた卒論や学生生活の様々なエピソードを思い出すきっかけにもなり、かつて抱いていた情熱を再燃させたり、青春時代を懐かしむこともできます。

※“ふつうの人”の基準について

普段から取材の申し込みをされるような著名人ではない人。ただし、エピソードとしては個性的なものを中心に掲載する予定です。売り出すために、数人程度の著名人のインタビューを入れ、フックとすることも考えています。

・卒論のテーマが決まっていない大学1～3年生

どのようなテーマで書けばいいのか迷っている学生が、実際に書かれた幅広いテーマの卒論を知ることで、テーマ決めの参考にすることができます。

●サブターゲット：

・進学する大学や学部を決めていない中高生やその家族

様々なテーマの卒論を知ることで、大学・学部ごとに何を研究できるのか知ることができ、進路選択する上での参考になります。

8◆企画のねらい:

＜ “ふつう” の人々のライフストーリーに “卒論” というテーマから焦点をあて、十人十色の生きざまが垣間見れる本に。 ＞

今、大学で学んだこととは関係のない仕事や生活をしている人でも、熱中した学問や心血を注いだテーマなどがあつたはず。しかし、社会に出てしばらく経つと、普段の生活で「卒論、何書いた?」「学生時代、何を研究していた?」という話をじっくり語り合う機会はなかなかないと思います。

現在、NHK「ドキュメント 72 時間」、フジテレビ「ザ・ノンフィクション」など、“ふつう” の人に密着取材したテレビ番組が人気を博しています（※背景参照）。このように、一見“ふつう” の人であっても、それぞれが抱える多種多様な事情に迫ってみると、視聴者が驚いたり、感動したり、共感できるようなドラマが秘められていることがわかります。

また世の中には、「夢を叶えた」「希望の職業に就いた」人々の本やインタビュー記事は多いですが、実際に夢を叶えられる人はあまり多くはありません。好きなこと・熱中したことが仕事に直結しなかった人々の生きざまを伝えることによって、人々を勇気づけたら、いろいろな生き方があるということを広く伝えていきたいです。

＜ “卒論” および大学のイメージを変える! ＞

「こんな面白い卒論があるんだ!」と楽しんでもらうことで、中高生を含む学生たちが“卒論” ⇒ “大学”・“学問” に対して抱いている堅苦しいイメージを変え、自分だけの研究テーマを見つけるきっかけになればと考えています。

9◆企画の背景:

＜ 卒論も「何でもあり」な現代 ＞

“卒論” や、“ふつうの人々の学生時代” に焦点をあてた本は、まだ存在しません。サブカルチャー寄りの変わったテーマ（例:「初音ミクと『アウラ』の消失」）など、卒論も「何でもあり」になってきている今だからこそ、多種多様なインタビュー集となるはず。です。

また、幅広い年代の人々に聞いて回るため、「社会・大学制度の中で“卒論” というものがどのように変化しているか」が見えてきたり、同一のテーマを扱った卒論を比較することで研究進度や着眼点の違いを分析できたりと、時代の変化を実感することができま

＜ “ふつう” の人々が秘める面白さ ＞

NHK「ドキュメント 72 時間」

…2005 年 12 月放送開始。毎回ある 1 つの場所で 72 時間（3 日間）に渡って取材を行い、そこで見られるさまざまな人間模様を定点観測するという趣向のドキュメンタリー。

第12回出版甲子園

「人々が行き交う街角に3日間カメラを据えてみる。同じ時代に、たまたま居あわせた私たち。みんな、どんな事情を抱え、どこへ行く？ 想像をはるかに超える、多様で生き生きとした、人々の「いま」が見えてくる。」(番組HPより)

フジテレビ「ザ・ノンフィクション」

…1995年10月放送開始。現代日本を取り巻く社会問題や、市井の人々が人生に苦闘しながらも情熱を持って生きる姿を取り上げています。優れた放送番組に贈られる「ギャラクシー賞」をはじめ、多数の受賞歴を持ち、2013年には人気エピソードの映画化も行われました。

⇒ “一見ふつうの人々がもつライフストーリー”を追った番組は昔から根強い人気を持つため、一定数のターゲットの存在を**確実に**見込むことができます。

10◆類書との差別化:

・『よくわかる卒論の書き方』(ミネルヴァ書房) 他、卒論の書き方指南書

→「書き方」ではなく、卒論からみえてくるライフストーリーを中心に取上げます。

・『ぼくらは働く、未来をつくる。向井理×12人のトップランナー』(朝日新聞出版)

→いわゆる「トップランナー」(特殊な職業で活躍している人)のみではなく、“ふつう”のサラリーマンなども含めた幅広い人々にインタビューします。また、「学生時代に熱中した学問」を起点とし、「現在の職業や活動」も含めた「人生」について、広くお話を聞いていきます。

・『究極の愛について語る時に僕たちの語ること』(青月社)

世間一般の“ふつう”とは違う恋愛をしている一般の人々に、「愛」をテーマにインタビューした本。

・『おべんとうの時間』(木楽舎)

写真家・ライター夫妻が全国各地を訪ね歩き、「お弁当」をツールにしているんな職業の人たちの思いや生き方を取材した本。

→二冊とも、一般の人々にインタビューをする点で共通していますが、本書では「卒論」という、「学生時代を経験した多くの人々にとって身近」かつ「学生ならではの」ツールを切り口に、“ふつう”とされる人々が秘めている個々のライフストーリーを聞き出します。

11◆企画者の要望:

【書店での配置コーナー】

人生・くらし、進路、エッセイ、自己啓発書コーナーなど

【体裁イメージ】

四六判・表紙カラー・本文白黒。ゴールデン街のカラー写真を挿入。付録としてゴールデン街MAPを付けます。

12◆構成案:

※「様々な経歴を持つ人々の、様々な卒論のテーマ」という“雑多さ”“十人十色感”を出すため、あえて経歴・テーマごとにはまとめず、新宿ゴールデン街を区域ごとに分け、出会った場所ごとにまとめ、若い人から順にならべていく構成をとります。コラムとして、銀座や秋葉原など地域色の出そうな他の場所でのインタビューも挿入します。

1 はじめに

2 ゴールデン街ってどんな街？

3 100人の卒論名鑑 ※企画段階のため、一部架空のものがございます。

【花園1番街】

<file:001>真面目な国語教師（20代男性）－「谷崎潤一郎の変態性にみる純文学の本質」

<file:002>新人声優（20代女性）－「『プリキュア』の歴史が語る夢と絶望」

etc…

【花園3番街】

<file:017>メーカー営業（20代男性）－「ミトコンドリアの可能性」

<file:018>エロ本出版社経営（30代男性）－「ロシア思想の観念の臨界について」

etc…

【花園5番街】

<file:034>地方公務員（20代男性）－「初音ミクと『アウラ』の消失」

<file:035>ネイルサロンスタッフ（30代女性）－「22世紀の人工知能」

etc…

【マルハビル】

<file:050>写真家（30代男性）－「テンションのあげかた」

<file:051>元アイドル（30代女性）－「ファン心理が引き起こす現代社会の革命」

etc…

【花園8番街】

<file:066>新聞広告営業（20代女性）－「スナックが創成する地域社会」

<file:067>大手予備校管理職（40代男性）－「戦後社会における純文学——谷崎潤一郎から」

etc…

【まねき通り】

<file:084>現役アイドル（20代女性）－「『電波ソング』が少子化をくいどめる」

<file:085>元ボクサー（50代男性）－「海洋生物の分布からみる国際情勢」

etc…

<file:100>バーのマスター (60 代男性) - 「現代の紛争とこれからの核兵器」

4 コラム (名鑑の中に適宜挿入)

- ・「一体何を勉強してきたんだろう？」卒論に悩む現代の学生事情
- ・「とりあえず大学行っときたいけど……」大学選びに迷う中高生たち
- ・卒論並みの情熱！ トンデモ自主研究に熱中する人々
- ・芸術家のたまごたちの“卒論” 卒業制作紹介
- ・ママたちの学生時代 銀座の“卒論”
- ・クールジャパン!? 秋葉原の“卒論”
- ・古本とカレーの香り 神保町の“卒論”
- ・大学制度における“卒論” 今昔
- ・おわりに
- ・付録 ゴールデン街MAP

13◆見本原稿:

※こちらの方にはしっかりとインタビューしており、架空のものではございません。

<file:018>エロ本出版社経営 (30 代男性) - 「ロシア思想の観念の臨界について」

花園 3 番街「ロックバー WHO」木曜&日曜お店番・A さん (33)

マニア系の本・雑誌・DVDなどを制作する出版・映像制作会社「株式会社パブセンス」を経営。エロ女装雑誌「オトコノコ時代」編集長。女装AVシリーズ(映天/パブセンスフィルム)制作など。

あなたの卒論、何ですか？

俺の卒論は、「ロシア思想の観念の臨界について」。大学にいたのがちょうど 9.11 の頃で、その影響をすごく受けててさ。「テロリズム」ってものがどう起こるのか、っていうのを、ロシア思想を辿りながら論じて、って感じ。「エロ本作り」っていう今の仕事からは想像つかないだろうけど、かなりまじめに書いたよ(笑)。

昔から、「観念と土着の身体性」っていう問題にすごい興味があって。ロシアの文学とか思想史、特にドストエフスキーには、その問題意識が色濃く出てるんだよね。それは俺の経験とも重なる部分がかかなりあったから、シベリアに考えてた。俺、岡山県の漁村の生まれで、田舎のヤンキー文化に染まりながら育ったんだけど……中高生のとき、文学とか映画とかに触れたら、思想とか哲学とか、観念的な問題に取りつかれちゃって。そしたら、「土着するのが当たり前」っていう周囲の価値観に違和感を覚え始めた。そして、それをすごくバカにするようになった。「ともかく早く東京行きてえな」って。「東京に行ったら革命家になろう！」って思ってたくらい、左翼思想にも取りつかれてた(笑)。

それで、大学進学と同時に東京に出た。当時は学生運動が激しくて、学園祭も開かれないくらいだったけど、徐々に落ち着いて行って。きれいな学生会館ができたり、どんどんクリーンになって行って……。これはつまらないと思って、大学の外で活動することの方が多かったな。あと、映画が好きだったから、映画サークルに入ろうとしたけど、なじまなくて(笑)。演劇見に行ったら役者さんに声かけたりして、一人で自主映画を撮ってた。

そんな中で、9.11テロが起きた。当時は新聞社の記者会見班でバイトしてたから、9.11の記者会見も見に行ってた。そうやって政治の問題を身近に感じる一方で、好きだった先輩に失恋したりして……。これは「俗なことと高尚なことに引き裂かれる」という体験をしたんだよね。一見高尚な文学を書いているように思われがちなドストエフスキーも、そうやって「俗と高尚」に引き裂かれる経験をしてるんですよ。ルーレットに狂って賭博史を書いたりとかね(笑)。それも、元々持ってるてんかん気質とか、頭がよかった巡視の父親が農民に殺された、っていう経験から、賭博に走っちゃったっていう背景があって。そういう風に、いくら思想とか哲学とか高尚なことを考えていても、「自分の持つ生まれや身体性」という、俗っぽいものを切り捨てることはできないんだなって、身に染みるものがあった。それで、「ロシア思想の観念の臨界について」というテーマを選んだ。

学生時代はとにかく、自分一人の世界に閉じこもってたね。今よりコミュニケーション不全の、自意識過剰の人間だったから(笑)。そのときにすごく売れていた本で、永井均の「漫画を哲学する」という本があるんだけど、前書きの「哲学は溺れている人にとっての藁です」という言葉が、今でもすごく心に残ってる。あの時の俺にとって、まさに哲学は「藁」だった。そうやって思い詰める中で、1人で映画を撮ったり、新宿二丁目とかに通ってエロの世界に身を投じてみたりしたんだけど……。そういうのは「生身の自分の感覚」を大事にすることだったんだよね。だからそのうち、思想的な言葉とか頭に入ってこなくなると……。思想の本とか、読まなくなったね。

エロの世界への興味は、子どものときに街で拾ったエロ本がきっかけかな。昔の雑誌って、もっと雑多で、何でもアリだったんですよ。今の雑誌にはもう、ああいう、「溝に落ちてるエロ本のときめき」がないな、って(笑)。あの、ワクワクする感じがしない!(笑)。街の溝に落ちてる本とか、路地裏にある自動販売機で売ってるエロ本とか、そういう「すきま」もないし、本自体の「すきま」もない。昔のエロ本って、ライターが好き勝手に書いてるコラムとかがあって、マニアックな映画の話とか、エロとは関係ないことが書いてあったんだよね。エロ目当てで何回も読んでいたうちに、「なんだろうこれ」とって無性に気になって。ライターたちはきっと「なんでもいいから書いて」とって感じで依頼されたんだろうけど、そこに自分のリビドーとか思い入れを込めていたから、子ども心にもそれが伝わってきたのかな、って思うね。書いてある内容はよくわからないけど、思い入れの強さとほとぼしるエネルギーだけは、ビンビンに伝わってくる。

今はマニア誌の編集とか、AVの仕事をしているけど、現場ではとにかく毎日必死にやるしかないから、昔みたいにいろんなことを考えてる余裕もなくて……。好きなことをやるた

第 12 回出版甲子園

めに、どうやって金を用意するかとか、まさに俗っぽいことしか考えられない。でも俺は、「作りたいものしか作らない」という強いこだわりを持ってて、それができないんなら、コンビニのバイトとかやってるほうが全然いいと思ってる。本当に作りたい本の資金調達のために、清掃のバイトを1年半やったりとかもしたし。でも、それくらいは普通だと思っ
てて。「自分の作りたいものを作る」というのは、オナニーに近いことだと思うからね。本は、印刷費とか取次との問題とか、現実的な問題がたくさんあって大変で、そういうものを1個1個クリアしていだけでかなりのストレスがかかるし、時間もかかる。だけどエロの世界には、そういうのを超えられるようなやりがいがあるんだよね。おもしろいし、好きだから、やってる。

常に「観念的な思想」と「身体的な感覚」のあいだで引き裂かれてきた井戸さん。現在は、子どもながらにエネルギーを感じていた「エロ」の世界に、全エネルギーを注いでいる。かつては思想に、今はエロに—— 一見正反対に見える問題にも、人生に肉迫した一本の軸が通っているのだ。あなたにとっての「溺れたときの藁」、そして無我夢中になるほど「おもしろいし、好き」なものは、なんですか？